



表紙の花[長寿梅]

本弘寺別院

こども仏教

ブッダがせんせい

思いやり

お風呂の中で手が届かないところにある、おもちゃを取ろうとするとき、どうするかな。

こっちに来い、こっちに来いって自分の方へ水をひきよせるかな。すると、どうだろう。
おもちゃは、自分のところに来てくれないどころか、いつまでも遠くのほうにいないかな。

このおもちゃをとるにはね、あっち行け、あっち行けって水を送ると跳ね返って自分のところに来るんだよ。

これは、毎日の生活にも言えることだよ。自分のため、自分さえ良ければいいって思っていると幸せになれないよ。相手のために何かしてあげたり、困っている人がいたら何かお手伝いをしてあげて、その人たちが喜んでいる顔をみるとなんだか嬉しくなるよ。それが幸せってことなのかもね。
そして、みんなが喜んでいる姿が自分の喜びに変わるよ。

思いやりの気持ちを大切にしようね。

仏教では、自己中心的な物事の考え方を悪としています。娘がお風呂の中でおもちゃを取ろうとして自分の方に水を寄せてても、おもちゃは逃げていくとき、こうやつたら、おもちゃは自然と自分の方に返ってくるよと教えました。
子どもたちが、自分さえ良ければいい、他人のことはどうでもいいといった考えにならないよう、お教えください。

坊守

早いもので、今年も後わずかとなりました。冷え込みも厳しくなってきましたが、お風邪などお召になられていませんでしょうか。

さて、11月18日に報恩講の法要が無事に厳修されました。本院の副住職、お檀家さんたちもいらしてくださいなり賑やかな法要を迎えていただきました。ただ、平日ということもあり、地元の方々のお参りが少なかったため、平成28年から11月の第二土曜日に日程を変更いたします。よろしくお願ひ申し上げます。



元日には修正会がございます。
年明け初めての法要です。皆さんのお顔を拝見できるのを楽しみにしております。
もちろん、小さなお子様やご近所の方々、宗派が違う方でも、誰でもご参詣いただけます!!

修正会のお知らせ

日時 1月1日(金)
受付 10:30~ 法要 11:00~12:00

駐車場の台数に限りがありますので、恐れ入りますが、公共の交通機関をご利用くださいますようお願いいたします。

門徒もの知り帳

お正月といえば有名な神社などへ初詣に行ったりするのが日本人の習慣のようにいわれていますが、本来は縁のあるお寺や神社へお参りすることを初詣といいまして、佛教寺院では元旦の法要「修正会(しゅうじょうえ)」が行われます。

修正会とは新たな年を迎えて、仏さまの前で身を正し、あらためて自分自身を見つめ直し、1年を歩み出す新年の法要です。

お参りいただき、不可思議な縁の中に生まれ生かされている自分というものを、あらためて仏の御教えに照らしてみる機会にしていただければと思います。

浄土真宗の「お正月」の迎え方

浄土真宗ではお仏壇(お内仏)に鏡餅はお飾り致しますが、しめ縄や門松などは用いません。

年末はお正月の準備や大掃除などで忙しい時期ですが、是非お仏壇も掃除して気持ちよく新年をお迎えいたしましょう。

お花も松の枝や千両など正月らしいものを混ぜてみるのもいいかもしれません。

おたより募集



寺報をお読みいただき、ありがとうございます。
様々な方が手に取ってくださり嬉しい思います。
こんなこと教えて欲しい・ご自身の活動報告(仲間募集等)・お子様からのこども仏教の感想などなど、みなさんからのお便りをお待ちしております!!
★お寺で「大人のそろばん塾」をやりたいと思っていますが、どなたか先生になってくださる方はいませんでしょうか?

ち よ こ つ と 仏 教

「仏さまってどういう方・・？」

AINSHU泰因が日本を訪れた際、仏教を知りたいということで、浄土真宗の住職と対談することになりました。AINSHU泰因が「仏さまとは、どういう方ですか」と尋ねられると「姥捨て山」のお話をされたそうです。

昔、食料事情で貧しい地域では一定の年齢を超えた老人を口減らしのために山に捨てる風習がありました。姥捨て山の麓に住む、農夫が、老いた母親を捨てに行くことになりました。たとえ親思いの息子であっても、村の掟に背くわけにはいかず、母親を籠に乗せ、姥捨て山へと向かいました。ところが、その道すがら、背中に負わされた母親が、しきりに木の枝を折っては道々に捨てていくのです。これを見た若者は、「ひょっとして、母親は山奥に捨てられる恐怖心に耐えかねて、この落とした枝をたどって、また家に帰ってくるつもりではないのか」と疑ったのです。

「気丈な母親でも、やはり最期は自分のことしか考えないのか」と、少し蔑むような目で見ていました。とうとう捨て場所と思しきところに着き、息子は母親を背中から降ろし、別れを告げて帰ろうとしました。その時、母親は「いよいよこれがお前との一生の別れじや。身体に気をつけるんだよ。ずい分山奥まで入ったから、お前が家に帰るのに道に迷って困るだろうと思って、私が来る道すがら、小枝を落として目印をしておいたから、それを頼りに、無事家に帰るんだよ。そして立派に跡をついでくれ」そう言って、母親は息子に手を合わせるのでした。その母親の姿を見て若者は泣き崩れました。こちらは母親を捨てているのに、母はこちらをこんなに憂いでいる。こんな母をどうして捨てられようか、息子は、草むらに両手を着いて「どうかこの籠にお乗り下さい。これから我が家に御伴して、一代の限りお仕えいたします」と言って、再び母を背負って山を降りたということです。

ここまで話をされた住職は、AINSHU泰因に、「この母親の姿こそ、仏さまの姿であります」とおっしゃられたのです。

こんな状況でも、母親は自分のことは一切顧みないで、ひたすら我が子が無事家に帰れるかどうかだけを心配している。母は、今まさに自分を捨てようとしている我が子を見捨てることが出来ないのです。これが仏さまの心です。

AINSHU泰因は、この話をきいて涙を流されたそうです。このお話の大変なところは、親心という真実なるものに出遭うことによって、その息子が自らの不実さを知っていたというところにあります。

ここで語られる母親と息子の関係は、言うまでもなく阿弥陀さまと私たちの関係を表しています。自分を認め、見捨てずに案じてくださる存在に気付いたとき、このうえもない安らぎを頂くとともに人生の見え方が変わると思います。

12月8日、坊守(住職の妻)の祖父がお浄土に往生いたしました。

そのため、新年のご挨拶を控えさせていただきますこと、何卒ご了承くださいませ

本弘寺別院

秦野市渋沢 1398-12

TEL : 0463-82-9577

e honkouji.wakka@gmail.com